市制70周年記念　第53回厚木市広報写真コンクール　入賞者一覧

（入選等は順不同・番号順）

賞	タイトル	受賞者	写真	講評
厚木市長賞	五月の風・ 川を渡る笑い声	町野　正樹様		澄みわたる青空と穏やかな流れをたたえる川面、川岸を埋め尽くす新緑、色彩豊かな鯉のぼりのコントラストがまぶしい一枚である。恩曽川の上空を風に揺られて躍動する鯉のぼりの姿が、良く晴れた気持ちのいい一日に川岸へと足を運んだ人々のワクワクした心持ちを描写しているように見える。
神奈川新聞社賞	頼んだよ！	鈴木　邦昭様		田植え機の音とともに、写真のタイトル「頼んだよ！」の声が聞こえてきそうな一コマ。手拍子をしながら声掛けをする２人が今にも動き出しそうで、構図に躍動感を与えている。茶色い土に鮮やかな緑の苗のコントラストもいい。田植えの季節ならではの土の匂いもしてきそうで、五感に訴えてくる。「ふるさと厚木」を感じさせる作品。
市制70周年記念賞	農大で大根掘り	松苗　裕太様		農大生が栽培した大根をちびっ子たちが収穫！そんな楽しい体験のひとときがストレートに表現されている。たくさんの大根の葉に埋もれるように並ぶ親子3人の、はつらつと嬉しそうな表情が微笑ましい。未来の日本を支えていく大学生の学びの成果を地域の人たちと共有し、こどもたちの心が豊かに育つことが伺える貴重な一枚になった。
あつぎ ネイチャー賞	生きるということ	渋谷　勝夫様		市内でなかなか目にすることのないイタチが、水辺でザリガニを捕獲した一瞬を切り取った一枚。イタチの体は水で濡れており、「生きる」ために激しく格闘した跡が伺える。市内には様々な生物が生息しており、その生態系は食物連鎖によって成立している。一瞬の描写から、様々なことを考えさせてくれる作品である。
あつぎ 魅力発見賞	鮎まつりの クライマックス	奥野　悟史様		厚木市最大のイベント「鮎まつり」。その中でも特に注目される大花火大会の光景を、非常に美しく捉えている。的確なカメラポジションで、迫力のある花火だけではなく、人の姿が点々とシルエットで表現されていて、人間模様を垣間見ることができる。水面の反射も効果的に写し出されている点が素晴らしい。おそらく撮影者は、撮影技術もさることながら、この花火大会を知り尽くしているのであろう。
あつぎジュニア スナップ賞	高光	森　陽希様		学校の校舎の窓から望む何気ない日常の光景。眩しく入ってくる光が、いつもとは違う少し特別な空間を演出している。日常と言ったが、実はこの校舎という場所から撮影できるのは生徒の特権であることを忘れてはいけない。その意味では、この写真は作者にとって今しか撮ることができない貴重な一枚と言える。写真は、その価値が年月を経てわかることもある。若い人たちは今しか撮れない写真をぜひたくさん撮ってほしい。

賞	タイトル	受賞者	写真	講評
入選	黄昏時	榎本　正行様		西の空で、沈もうとする陽の光とうろこ雲がせめぎ合っている厚木中央公園での一こま。昨年7月から稼働しているミスト噴水が色鮮やかに噴き上がる中で、子どもたちが遊んでいる。タイトルは「黄昏時」。夕暮れ時の日常を切り取りつつ、子どもたちの顔が見分けにくい「誰（た）そ彼（かれ）？」の幻想的なひとときを捉えた一枚である。
入選	カラフルキャンパス	松苗　玲香様		井上純×壁画プロジェクト「フリーウォール」でのワンショット。工事の仮囲いの真っ白なキャンバスに思い切り描いた絵。満足そうな笑顔が印象的である。絵の具まみれになった少年と、「壁画」を背景に大きく配置したことによって、写真全体から賑やかで華やかなイメージが強く伝わってくる。写っているのは一人だが、この絵を描いた多くの人たちの姿も見えてくるような迫力のある１枚になった。
入選	家族で田植え	山本　麻子様		田植えをしている家族の楽しそうな会話が聞こえてきそう。見る者が自然と笑顔になる、ほのぼのとした一枚。被写体に近付きつつも、植えた稲を手前に写し込んだことで、遠近感のある構図になった。水田に家族の影が映っていることも、立体感につながっている。何年か経った時に、この写真を見ながら、家族の会話もまた弾みそうだ。
入選	小田急線と薔薇	中野　絵理子様		初夏の相模川沿いに咲いたバラと鉄橋を渡ってくる小田急線を写した一枚である。日常の中で見つけた美しさを際立たせるために、電車の到来を待ったであろう姿が目に浮かぶ。電車、バラ、河原、通行人を写した構図のバランスがいい。惜しむらくはピントが電車側にあることである。バラを主役すると、季節感が際立って広報写真としての価値も高まるのではないか。
入選	止まれ、秋	宮田　敦輝様		「止まれ」の標識と季節の瞬間を切り取った時の静止した感覚がうまくマッチしたタイトル。高校３年間はあっという間。高校時代はきらきらとまぶしくもあり、時には悩み多き年頃でもある。学校への道を照らす光とイチョウの木陰のコントラストが、シャッターを押した生徒のそんな気持ちを表現しているようだ。このまま時が止まってしまえばいいのに、と思わせる。
総評	厚木の魅力的な風景や情景、人々の様子を写した多くの写真に出会うことができた。スマートフォンの普及と、カメラアプリの精度の向上によって、「写真」は現代の私たちにとって、より身近なものになったと言えるだろう。「あ！きれい」「面白い！」「かわいい！」と思った瞬間の、目の前の世界を真っ直ぐ捉えた写真が多かった。 入賞した11点の作品を改めて見てみると、画面の中に「主役」と「脇役」がしっかり共存していることがわかる。撮影者は、ある魅力的な被写体に惹かれ、ひと呼吸おいて、周りの被写体や背景を効果的に画面の中に取り込んでいる。広い意味で被写体との「会話」がなされ、丁寧に撮影されたものが上位作品に選出された。			